

沖縄・福島 なにを聞き、なにを語るか

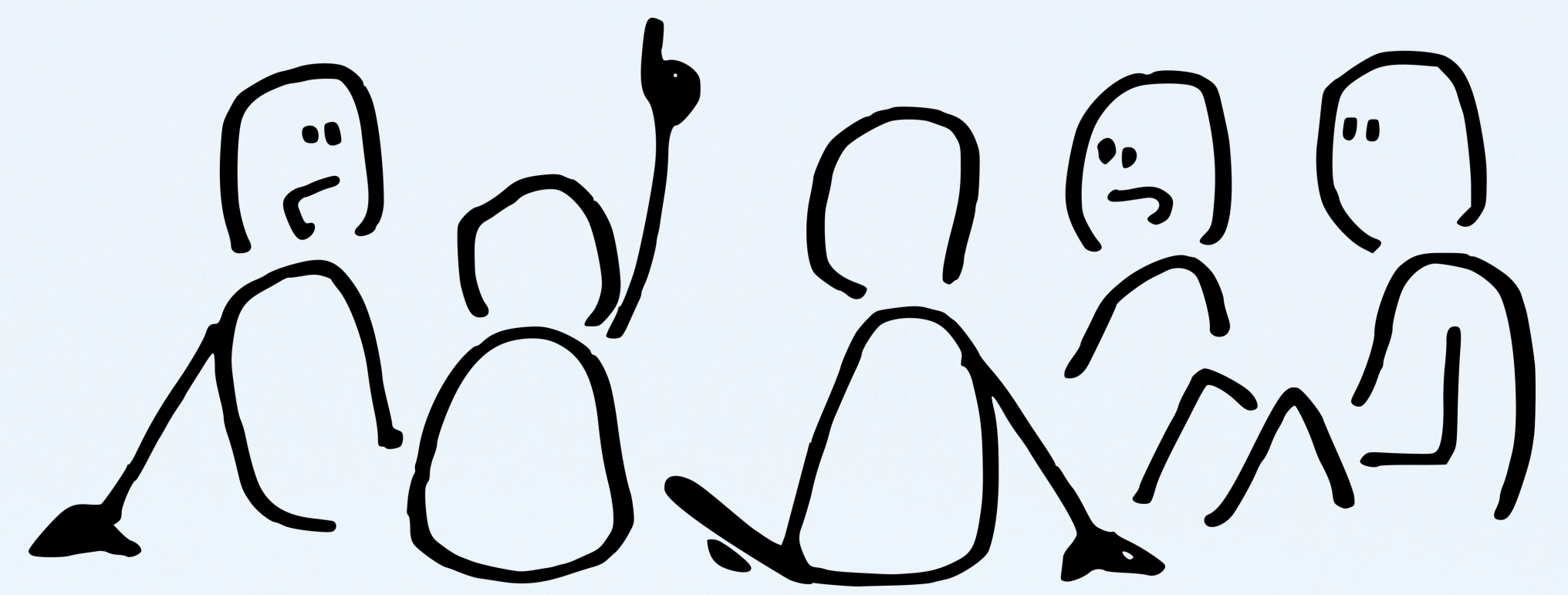
～沖縄の事例から福島の聞き書きを考える～

沖縄出身の石川勇人さん（大阪大学大学院）より沖縄戦の聞き取り活動について紹介いただいたあと、前川直哉さん（福島大学准教授）と木村紀夫（大熊未来塾 代表理事）を含めた3名でパネルトークを行います。今回は、より深く学び合いの機会とするため、参加者の皆さんのグループワークも予定しています。ぜひ、ご参加ください！



石川 勇人さん

沖縄県那覇市育ち。大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程在籍。専門は歴史社会学・質的調査法。沖縄戦の継承団体に参加しながら、沖縄戦体験者や沖縄戦の聞き手たちを中心に聞き書きを行っている。修士課程では、沖縄県内の自治体と連携し、沖縄戦体験者への聞き書きを行った。



前川 直哉さん

兵庫県尼崎市生まれ。福島大学教育推進機構准教授。高校3年時に阪神・淡路大震災で被災。灘中・高教諭を経て2014年に福島市に転居し「ふくしま学びのネットワーク」を設立、理事・事務局長を務める。福島大学では授業「むらの大学」などで、学生による震災・原発事故の伝承に取り組む。専門は教育学・社会学(ジェンダー/セクシュアリティ)。



木村 紀夫

福島県大熊町生まれ。2011年の震災の津波で家族3人が犠牲になり、更に原発事故によりその捜索も阻まれる。次女汐凧(ゆうな)の遺骨発見まで5年9か月を要し、未だその8割は見つかっていない。定期的に続ける捜索の他に、中間貯蔵施設に含まれてしまった自宅周辺を案内しながらの語り部活動で大熊未来塾として継続している。

昨年、大熊未来塾の仲間たちとともに、沖縄視察をしたときのこと。「魂魄の塔」から米須海岸まで、ガイドの方と徒歩でむかいました。天気がとても良く、穏やかで透き通る海。一同「きれい！」という歓声があがり、サーフィンを楽しむ若者もいました。

しかし、沖縄戦のときは南へ逃げていた住民の人たちがこの海岸に追い込まれ、多くの命が犠牲になった場所。現場で語る人、または聞いたことを語る人がいなければ、ただ「きれい」「たのしい」で終始してしまう。

社会的背景は全く違いますが、観光や目先の豊かさが大きな声で語られ、一方でそこにあった命が語られないという現状は、福島も重なるところがあるのではないのでしょうか？

いま聞くべきこと、のこしたい語りを、みんなで考えませんか。



日時：12/1(日) 13:00～16:00（12:30開場）

会場：Linkる大熊 多目的ホール（大熊町大川原字南平1207-1）

参加：無料、要申込み(定員30名)QRコードを読み取るかメールまたはお電話にてご連絡ください。

主催：一般社団法人大熊未来塾

お問合せ先：(Mail) okuma.future@gmail.com (Tel) 080-1472-3763

(WEB) <https://okuma-future.jp/>

